

混合回帰空間自己回帰モデルの 有効な自己回帰パラメータ範囲

東京大学 力丸佑紀

(株) データサイエンスコンソーシアム 柴田里程

混合空間自己回帰モデル

□ 混合回帰空間自己回帰(MRSAR)モデル

$$\mathbf{z} = \lambda W \mathbf{z} + X \boldsymbol{\beta} + \boldsymbol{\varepsilon}$$

$$\boldsymbol{\varepsilon} \sim N(\mathbf{0}, \sigma^2 I)$$

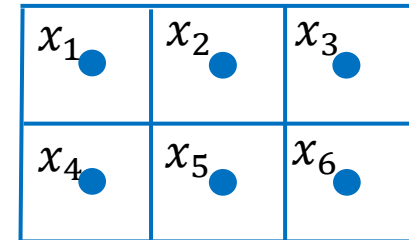
■ 空間重み行列 W

- 空間内の2地点 i, j に依存関係がある場合, それに対応する要素を $w_{i,j} \neq 0$ で与え, 依存関係がない場合, 要素を0とする行列

よく使われる空間重み行列 W

- 隣接行列

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 0 & 1 & 0 & 0 \\ 1 & 0 & 1 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 0 & 0 & 1 \\ 1 & 0 & 0 & 0 & 1 & 0 \\ 0 & 1 & 0 & 1 & 0 & 1 \\ 0 & 0 & 1 & 0 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

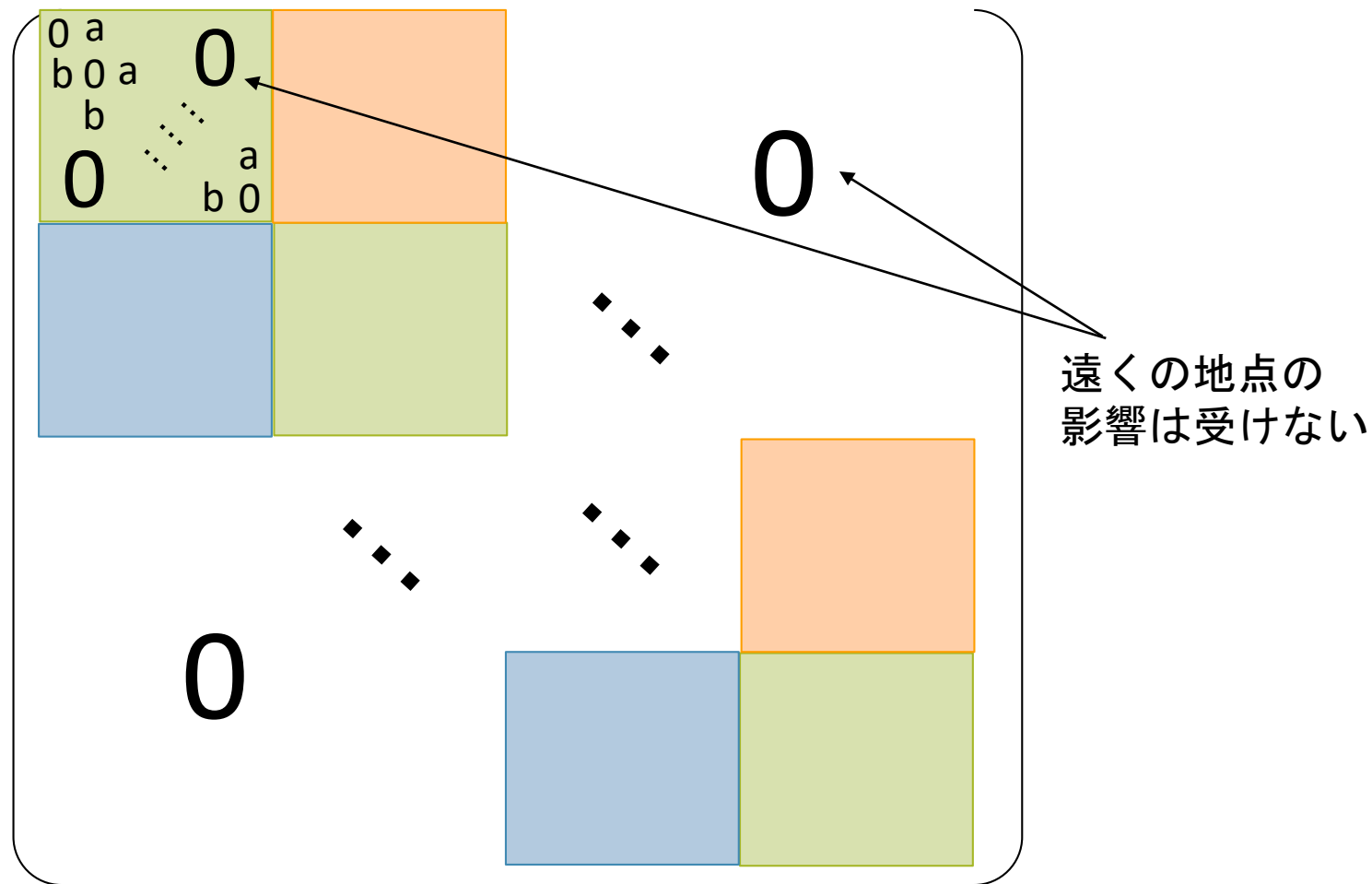


- 距離の逆数を要素とする行列

$$\begin{pmatrix} 0 & 1 & 1/2 & 1 & 1/\sqrt{2} & 1/\sqrt{5} \\ 1 & 0 & 1 & 1/\sqrt{2} & 1 & 1/\sqrt{2} \\ 1/2 & 1 & 0 & 1/\sqrt{5} & 1/\sqrt{2} & 1 \\ 1 & 1/\sqrt{2} & 1/\sqrt{5} & 0 & 1 & 1/2 \\ 1/\sqrt{2} & 1 & 1/\sqrt{2} & 1 & 0 & 1 \\ 1/\sqrt{5} & 1/\sqrt{2} & 1 & 1/2 & 1 & 0 \end{pmatrix}$$

Wの設定

□ 帯行列のクロネッカー積



Lee(2004)の条件

- 最尤法によるパラメータ推定で、8つの条件が必要
- ✓ ε は $N(\mathbf{0}, \sigma^2 I)$ にしたがう
- ✓ W の (i, j) 成分 w_{ij} は一様に $O(1/h_n)$
- ✓ $\liminf_{n \rightarrow \infty} h_n > 0$ かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} h_n/n = 0$
- ✓ $S(\lambda) = I - \lambda W$ は正則行列
- ✓ W と $S(\lambda)^{-1}$ は行和と列和に関して一様に有界
- ✓ X の任意の成分は n に関して一様に有界であり、 $\lim_{n \rightarrow \infty} X^T X/n$ が存在して正則行列
- ✓ Λ を R のコンパクト集合、 λ_0 を Λ の内点とする。 Λ 上で $S(\lambda)^{-1}$ は λ および n に関して一様に行和および列和が有界
- ✓ $\lim_{n \rightarrow \infty} (X, W S^{-1} X \beta_0)^T (X, W S^{-1} X \beta_0)/n$ が存在して、正則行列

Lee(2004)の条件

- 最尤法によるパラメータ推定で、8つの条件が必要
- ✓ ε は $N(\mathbf{0}, \sigma^2 I)$ にしたがう
- ✓ W の (i, j) 成分 w_{ij} は一様に $O(1/h_n)$
- ✓ $\liminf_{n \rightarrow \infty} h_n > 0$ かつ $\lim_{n \rightarrow \infty} h_n/n = 0$
- ✓ $S(\lambda) = I - \lambda W$ は正則行列
- ✓ W と $S(\lambda)^{-1}$ は行和と列和に関して一様に有界
- ✓ X の任意の成分は n に関して一様に有界であり、 $\lim_{n \rightarrow \infty} X^T X/n$ が存在して正則行列
- ✓ Λ を R のコンパクト集合、 λ_0 を Λ の内点とする。 Λ 上で $S(\lambda)^{-1}$ は λ および n に関して一様に行和および列和が有界
- ✓ $\lim_{n \rightarrow \infty} (X, W S^{-1} X \beta_0)^T (X, W S^{-1} X \beta_0)/n$ が存在して、正則行列

$S(\lambda)$ の正則性

□ $\det(S(\lambda)) = \det(I - \lambda W) \neq 0$

⇔ λ は W の固有値の逆数ではない

□ W の固有値

$$\xi_j(W) \approx \sum_{k \in K} w_k \exp(i \omega_{n,j}^T k)$$

$$\omega_{n_\ell, j_\ell} = \frac{2\pi i(j_\ell - 1)}{n_\ell}, \quad j_\ell = 1, 2, \dots, n_\ell$$

- W が対称なら, $\xi_j(W)$ はすべて実数
- n が増えるほど, 固有値の数は増える

$S(\lambda)$ の正則性

- W の固有値が存在する範囲

$$|\xi_j(W)| < \sum_{k \in K} |w_k|$$

- n が増えるほどこの範囲内に密に固有値が存在

- W が対称行列の場合,
 $S(\lambda)$ が正則になるための十分条件

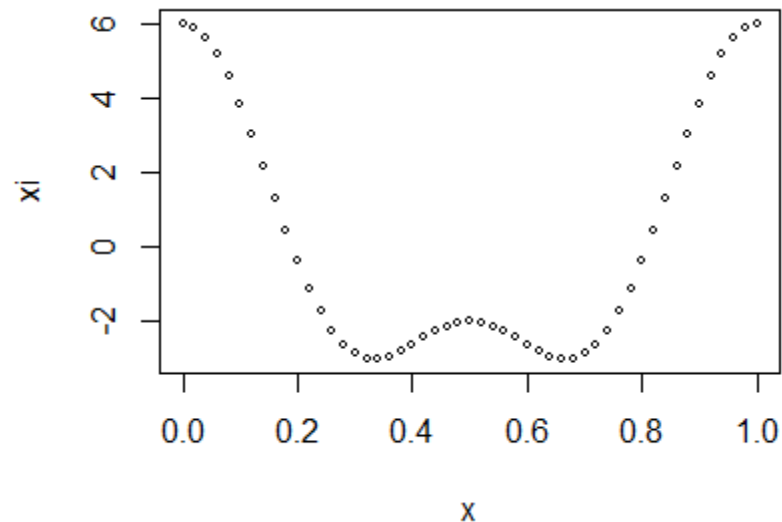
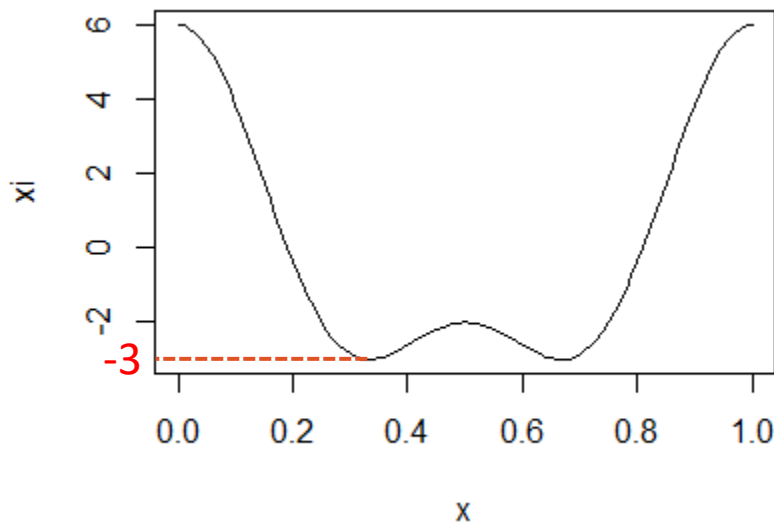
$$|\lambda| < \frac{1}{\sum_{k \in K} |w_k|}$$

- 固有値に関係ない範囲
- 下側は実際には少し広い範囲

例)

□ 2つ隣まで依存関係あり ($k = \pm 1, \pm 2$)

□ $w_1 = w_{-1} = 2, w_2 = w_{-2} = 1$



$$\xi = \sum_{k=-2}^2 w_k \exp(2\pi i x k) \quad 0 \leq x < 1$$

$$\xi_j = \sum_{k=-2}^2 w_k \exp\left(\frac{2\pi i (j-1)k}{n}\right) \quad n = 50$$

$S(\lambda)$ が絶対正則な範囲 $-\frac{1}{3} < \lambda < \frac{1}{6}$

範囲外では何が起きるか

□ $S(\lambda)$ が非正則な点では尤度が $-\infty$

$$L = \frac{1}{2} \log \det \left(\frac{S(\lambda)^T S(\lambda)}{\sigma^2} \right) - \frac{N}{2} \log 2\pi \\ - \frac{1}{2} (z - S(\lambda)^{-1} X \beta)^T \frac{S(\lambda)^T S(\lambda)}{\sigma^2} (z - S(\lambda)^{-1} X \beta)$$

■ 非正則な点の付近でも

→ 最尤推定量が求まらない

$\hat{\lambda}$ だけでなく, $\hat{\beta}$, $\hat{\sigma}^2$ も

範囲内なら

□ $\{z_v\}$ は漸近定常

■ $\{z_v, v \in N_{n_1, n_2}\}$ が漸近定常

➤ $N_{n_1, n_2} = \{(v_1, v_2); |v_1| \leq n_1, |v_2| \leq n_2\}$

ある $\gamma_v, v \in R^2$ が存在して、任意の $\varepsilon > 0$ に対し、ある (N_1, N_2) が存在して、すべての $v, v' \in N_{n_1, n_2}$ と $n_1 \geq N_1, n_2 \geq N_2$ に対して

$$|\gamma_{v, v'} - \gamma_{v-v'}| < \varepsilon$$

□ 一貫性, 漸近正規性, 漸近有効性をもつ推定量を求められる

■ Rikimaru and Shibata(2016) を活かして証明可能

- 定常過程におけるSARモデルの新しい近似尤度の提案
- 一貫性, 漸近正規性, 漸近有効性をもつことを証明

結論

- W が帯行列のクロネッカー積で対称の場合,

$$|\lambda| < \frac{1}{\sum_{k \in K} |w_k|}$$

の範囲内なら安全に推定できる

- W の固有値を求めなくても求まる範囲
- しかも良い推定量が得られる
- 範囲外の場合, 注意しなければならない
 - β も含め, 推定が信用できない可能性